

鳥の八

伊藤 整

鳥の火

伊藤 整



光文社

昭和二十八年十一月二十五日印刷
昭和二十八年十一月二十九日初版發行

定價 三〇〇円

火の鳥

著者 伊藤 整

発行者 神吉 晴夫

印刷者 山元 正宜

印刷所 三晃印刷株式会社

東京都文京区柳町二六

発行所

株式会社 光文社

東京都文京区音羽町三ノ一九

電話九段(33) 一三一―一三九

振替東京 一一五三四七番

(関川製本)

目次

一	むしばめる花	三
二	造花	三四
三	誘惑	五三
四	変幻	七三
五	火の鳥	九三
六	渦巻	一四三
七	薔薇座	一八二
八	猿と人	二三五
	「火の鳥」あとがき	二六六

装
画

三
雲
祥
之
助

火

の

鳥

一　むしばめる花

1

子供の泣き声が耳に入つて目が覚めた。眠りが足りないと思うと、私はすべてのことが厭わしい。もう眠れそうもないので、起きて鏡の前に坐つてみた。顔の皮膚は荒れていて、クリームで拭つても汚れが残つている。朝のうち風呂へ入るといいのだが、今の姉との生活では、私には言い出せない。昨夜姉は風呂を沸かしてくれたのだが、私が帰つたときは大分冷えていた。姉は起きて寝巻のまま石炭をくべ出したが、タア子が泣き出した。「いいのよ、お姉さん、私がする。タア子が泣いてる」と私は言つた。私は子供の泣き声が我慢できない。私の中に、いつまでも癒着しない傷があつて、そこに響くのだ。泣き声、子供の、赤ん坊の、人間の、猿の、あの泣き声。私には我慢ならない。あれが私にはたまらない。「そう、じゃ沸かして入つて下さいね。いやなつちまうのよ。私がいなくとすぐ目を覚ますんだから。」姉はそう言つてガチャンと焚き口の蓋をしめ、冷たい廊下を出て行つた。その細帯をした後姿を、私は、汚らしい生き物を見るように見送つた。女は四十すぎても子供を産み、その子供のために、男への憎しみ怨みを忘れることが

できる。私は、女をそういうものとして証明して見せる姉をゆるすことができない。私は自分がきつい目をしているのが分つた。私なら、と思つた。

そして私は、姉の父とちがう私の父を、どうかすると自分ですら「外国人」と思いがちな父の姿をちらと浮ばせた。昨夜、私はそのまま風呂を焚くのをやめて、自分の室へ戻つた。酒の酔いはさめ切つていず、私はあの、どうでもなるようになれという意識のなかで、それでも型を崩すまいとして服を脱ぎ、蒲団の中に滑り込んだ。寝巻は枕の横に疊まれたままだつた。

何という顔だろう。眼の前にある拡大された自分の顔、それは世間で言う、あの三十女の顔なのだ。あるときは、とても汚ならしく、あるときは、女の命のさかりのように見える。私は西洋の女のように早く衰えが来るのかも知れない。私の肌はほとんど白壁のように白い。日本の女にも白い肌はある。それは、東洋人に共通の赤い濁りから抜け出した間違ひのような白さで、たいてい美しい血の色を皮下に持つている。私のはそうでない。私のは、何かの色、白く塗られたような、白いのが汚れであるような白さだ。髪は黒に近いが、大分赤味を帯びている。私の肌は、少女時代、それから二十五歳頃までは、自分でもうつとりするように美しかった。私は何時間も鏡の前に坐つて、見ていたものだつた。上級生や友達が私を見る目つきで、私は自分を眺めた。まぶしいような、うつとりするような、神聖なものを見るような目つき。この私は美しいのだ。ああいう目つきをあの人たちにさせずにおかないくらい美しいのだ。私は自分の美しさに、その頃

は、酔つていた。暗い所では黒く見え、明るい所ではやや藍色に見え、どうかすると緑色に近くなる眼の色、目と目の間が少し離れているのが少女らしいあどけなさを作っていることも私は知つていた。その自分の顔を、私はあの黄色い、赤い、でなければ血の色の透いて見える白い皮膚と真黒い髪と眼を持つた日本の少女たちが、西洋の物語りの美しい妖精にあこがれる目つきで見つめるのを感じていた。だけど、彼女たちは怖いもののように私の身近に來なかつた。私は美にかつた。しかし私は誰の S にもならなかつた。西洋人のメイドの生んだ子、いいえ、それではない。私の異質の美しさ自体があの人たちを近づけないのであつた。私と愛の告白をし合つたり、身体の接触をし合うのはあの人たちにとつて、怖ろしいことだつた。

そして、それが私をやるせなくし、私の毎日を、演技的にした。私はそのときから芸をしてゐた。七つまで英語で暮してゐた私は、父が帰国して母と二人、いいえ、間もなく姉と三人で日本語で暮し、日本の学校や友達の世界に入つたけれども、女学校に入ると英語は急速にうまくなつた。初め、それを私は自分の赤い髪と同じように恥じ、隠そうとした。しかしその卒業頃、私は自分の美しさが人の目を引くようになると同時に、自分の生まれに対して自信を持つた。女子大学に入り、私は積極的に自分を作つて行つた。日本が中国で戦争を始める少し前、あの女子大学には秘密な社会科学研究会もあり、定期的に外語劇大会が催されてゐた。私の容貌と語学とは、そういう雰囲気の中で目立つた。私はロメオを、チルチルを演じた。いつも男役が私にまわつた。

背が高いとか、動作がはつきりしているとか言う口実で、私は主役を押しつけられた。そして学園生活でも、私はそういう役を持つていた。日本の家庭で、未来の同じような家庭の主婦になる鑄型にはめ込まれながら育つて来た少女たちは、自分の意見、自分の一人立ちの心を持つていないのだ。何かにもたれ、絡まり、陰口を言う。私はそんな風に育たなかつた。父が帰国してから呼び寄せた姉に向つては、母は「フミ子、そんな歩き方は」とか「フミ子、足袋のコハゼはどうしたんです」と言うように、自分の附屬物としてやかましく言つたが、私に向つては、階級の違う人の預り子のように接した。父の記憶が、父の動作が、いつも、私の中に現れるという予期と怖れで母は私を見ていたにちがいない。父の記憶が、私を日本人に躰けることから母を妨げたのだつた。私は母にかしずかれて育つた。姉も次第にその母の調子を見習つた。父からの毎月の送金はきちんと正金銀行に払い込まれていた。つまりそれは私の金だつたのだ。戦争が近づき、為替相場が変ると、二十ポンドの金は日本の円で次第に多くなつた。私は空白な成長の中で、母や十ちがいの姉や級友たちが作る窪み、遠慮、期待などの中へ自分を伸ばして行くより外なかつた。英語の教師たちですら、私の発音の自然さに一目おいて、私を腫れもの扱いにした。私はその頃から、時々ヒステリックになつた。私が手を伸ばすと、すつと相手が引つ込む。その空白な周囲の苛立たしさ。それは恐怖のように私を駆り立てた。私は自分の鑄型を、父を求めた。父に手紙を書くことは禁じられていた。私には一人の妹、二人の弟が、イギリスに居るということだつた。

私はある時ラムを読んで泣いた。それは、ちゃんとした家庭で、落ちぶれた好ましくない縁者が持てあまされる話だった。私は母にも言わない悲しみを持つようになった。私は姉に物をぶつけ、何日も母に口を利かなかつた。母はおろおろし、足音を忍ばせて家の中を歩いた。

私は学園であの秘密研究会に出た。黒い色の汚いカラーをつけた青年が階級構成の理論を説明し、五六人の学友が身体を固くして聞いていた。私はその帰りにもらったパンフレットを何冊か読んだ。そしてそれつきり出なかつた。「どうしたのよ、エミちゃん、もう出席しないの？」と、男のようないかつい顔と身体をした同級生の村井さんが、教室の窓の下、乾いた下水の両側に脚を開いて、私に言った。村井さんですら、私に向つては顔を近寄せない。私がなにか触つてならない神聖な、また穢れたもののように。私は「うふつ」と含み笑いして、靴底でザクザクする下水溝の角をこすつていた。It can't mend my sole. と私はその時習つていた「ジュリアス・シザア」の靴屋を引用したところだった。地下運動の資金募集の話があつたとき、私は村井さんに金をあげた。「これ、あなたにあげるのよ」と私は言った。とにかく私に秘密をうちあげるところまで近づいてくれた村井さんに、私はあなたが好きだけど、と、もう少しで言うところだった。私を学友と親しく結びつけたかも知れないたつた一つの機会はそれで失われた。

その頃私に、いいえ、私の不幸に気づいたのは会話の教授にいらしていた尼さんのアーメンガアド先生だった。私に話しかけると、アーメンガアド先生の皺に蔽われた真蒼な大きな眼は、

心持ち外の生徒へよりも長く注がれていた。私は私で、授業が終つて桜の並木の下を、校門のあたりまで神経痛の脚を心持ち引きずるようにして歩いてゆく先生の黒い尼僧服の後姿を、じつと見送つていた。

でも私は先生の姿が見えなくなると、すぐスカートをなびかすようにして階段を駆け下り、校庭の隅にある劇研究室に行くのだつた。私は花形だつた。その頃絶頂にあつた少女歌劇では、男役をする少女たちが花形だつたように、女の学校ではロメオになりチルチルになる私が花形だつたのだ。そして私はそのとおり振舞つた。自分の美しさにこだわらないこと、確信ありげに振舞うこと、私にとっては学校が舞台だつた。見られて生きること、内側のむなしさを逃れて、見える自分を作り、皮膚や表情や動作で生活すること、火花のようなものを絶えず身のまわりに作っていることが私の日常だつた。いつか私はアーメンガアド先生に話しかけるかも知れない。すると私は別な私になるかも知れない、と私は思つていた。でも私はそういう自分にならないように一生懸命やらなければならないのだと思つた。アーメンガアド先生とお話したりすれば、私は自分を失つて泣き出すだろう。私はみなし児だ。私はどこにも生きる場所のない捨児なのだ。よしんば泣いて、あの先生の胸にすがたとしても、それが何だろう。アーメンガアド先生は私と同じじゃない。あの人だつて心は向うにある。大海と大陸を隔てた、あの古い文明と古い都市と古い生活と、そして私がその一人ではない群集とに、あの人はずながつている。

そして今、それから十年あまり時がたつて、私は、雀の轉つてゐる窓の前で化粧を落した自分の顔を見ている。怖いもののように、内証で、私は自分に向い合う。なんという汚れたらう。きめに染み込んだ塵のようなものは、もう取れないのだ。あの黄色い、なめらかな皮膚には浸み込まないものを、私の皮膚は吸い取り、そして定着させてしまう。あの聖画に漂うような、金色に反映する美しい少女時代の私の皮膚は失われた。そして顔の形が、頬、顎、輪郭、目鼻立ちが、私をぞつとさせる荒地のように拡大されて鏡に写つてゐる。モンゴリア型。目と目の間が離れ、頬骨が広く出ばつてゐる東洋の顔が、私をおびやかす。ほら、ねえ、と言うように。母が亡くなつてから、世帯の苦勞をした揚句私の所へもどつた姉を、私は母とそっくりだと思つた。だが、私もそうなのだ。皮膚の輝きの失われた私の顔の型は、それはあの母の顔だつた。そして次第に私はこの土地に結びつき、この東京に、日本の人間に混り込んで行くのが分る。だが私は氣を取り直す。顔は役者の私にとつては、カンヴァスのようなものだ。なあに、という氣持で、私はその恐怖をすつと跨いで越す。今私の前にある顔は、これはどうにでも使える。その上を一度塗れば、それは昔の少女の私以上の、どんな種類の美しさでも作り出せる。そして私は美しい、と自分に言いきかせる。自分がそう思い込んだ瞬間から、私の顔は美しく輝き出すような氣がする。何

という考に私は慣れて来たのだらう。

扉を叩く音がして姉の顔がのぞいた。「ちよつと」と言つて、音を立てずにカーペットをふんで来る。いつでも小声、猫のように、腰をかがめて歩く。もうタア子の昼寝の時間らしい。姉は小さな封筒の手紙を差し出して、

「昨日いらしたんだけど、留守だと申し上げたら、手紙を書いて……」

私は聞きながら文字を見てはつとした。杉山の手だ。

「それで……」と私は姉を見る。

「何とおつしやらないで……昨夜忘れていたものだから。」

「ええ、いいわ、ありがとう。」

私が聞きたいのは杉山がどんな様子をしていたか、どんな表情だったかということだけれども、姉はそこまで私の方に立ち入らない。出て行く姉の後から、

「食事もうすぐするわ」と言つて私は封を切る。事務所にも二度男の声で電話があつたと言う。

手帖を引き裂いた紙に「一度お目にかかりたいのです。面倒な話ではありません。書良氏からも話して頂いたと思います。また参ります」と書いてある。こちこちと固まつた見えていて苦しくなる文字だ。この文字の性格がすべてのああいふ事の原因だった。何かぞつとするような、自分の内側にある厭わしい記憶が群らがつて来る。網の一端を鈎にかけてしまうと全体がやがて水の中

から上つて来る時のように、つながつて群らがつて押しよせる。強い力で胸をしめつけられるような緊張が始まる。小劇場の文芸部室の乱雑な埃をかぶつた棚や背の破れたソファや、母がやつて来て玄關にたたずんでいた彼の下宿や、今と同じ字で書いた彼の売れない脚本の封筒にベタベタと貼つた切手など。それから、犬が爪先でしがみつのように、「別れない理由はどうでもいいんだ。おれは別れないんだ」と言つて、瘦せた身体で畳に胡座をかいたまま、あらゆる筋肉を引きしめるようにしたあの人の顔が浮んで来る。

だが、それと重り合うようにあの田島先生が、学園の大きな硝子戸のはまつた談話室で、腰かけた私たちの前に進んで来たときの黒いズボンの姿が現れる。英文助教授の岩井女史は子供のようにはにかんで紹介した。それを待つてゐる間、四十歳近くに見えた田島先生は岩井女史の戸まどいも私たちの緊張も全体として静かな作法の中に受けとつていた。あの歩きかた、片足ずつ意識して前へ出す慎重な落ちつきは、日本人の紳士のいかめしさと違うものだった。私は遠くに、あの煙草の匂のようなもの、父が家の中を歩きまわつた姿を思い出した。それからよく訪ねて来たマクカラアさんやマクカラア奥さんのカステラのような匂を。あの軟い、他人にも自分にも均等に気を配る注意深さ。あれは翻訳ものの上演になると、私たちの仲間に欠けているものだった。土岐さんも笛子さんも、みんな自分にだけ集中してこちこちの日本人になる。後になつて、それだと段々気のついたもの、それは父と田島先生に私が嗅ぎつけた共通のものだった。「私は先頃

ヨーロッパの見学旅行から帰りましたので、向うの実験的な新しい演劇についてお話したいと思っています……」ピネロウとダンセイニ、ピトエフ、ヴィユウ・コロンビエ、クレイグ、芸術座の話。純粹演劇と実験劇場。あの時のお話は、その後の薔薇座での稽古の間に絶えず聞かされた演技論と私の心の中で混り合っている。しかしあの黒いズボンの片足ずつを静かに伸ばすように前へ出た先生の最初の印象、あれが私を薔薇座に引き込んだ本当のキッカケだった。

そのあとで私たちは、一週間ほど前にすんだ外語劇のキャピュレット家の広間の場を立稽古の形でお目にかけた。ずいぶん恥しかった。セリフには自信があつたが、研究会長の岩井女史があがつてしまつていたので、それが皆に伝染した。田島先生は幕になると同時に「あなたは」と、私を指で差し、鋭い、はつとするようなきつい眼で私を見て仰しやつた。地で行つていてかなり上手だ。だがそれは、言わばあなた自身の顔や身体の出しているだけです。ロメオは口実であるにすぎませんね。もつとも専門家の批評をしているのでありませんから、これは言いすぎですが、と。外の人たちには何も言わなかつた。そのあとで奥家先生と岩井女史に讃辭を呈されたとのこと。そして、私のことを訊ねていたそうだ。そして私は卒業後、いやいや勤めていた女学校の英語教師に少し慣れた頃、突然田島先生のところへ呼び出されて、言わば夢中でアーニヤをやらされ、その後でびつくりするような厳しい稽古と、俳優仲間の意地悪さと、嫉妬の渦の中へ投げ込まれた。私の生活はそうして始まつたのだつた。杉山とのこと……